

新體詩鈔

初編

外山正一
矢野龍溪
井上哲次郎
編

全

柳田文庫

文庫11

A 145

30

25

20

15

10

外山正一
井田部良吉
上哲次郎
全撰

初編

新體詩鈔 全

明治十七年十二月再版

柳田泉文庫

新體詩抄序

程子曰。古人之詩。如今之歌曲。雖閭里童稚。皆習聞之。而知其說。故能興起。今雖老師宿儒。尚不能曉其義。況學者乎。是不得興於詩也。余讀此文。慨然而歎曰。今之歌曲。如古人之詩。而令人不知之。賤今之歌曲。而尚古人之詩。嗚呼。亦惑矣。何不取今之歌曲乎。後讀傳記。見原益軒齋謂曰。我邦只可曰和歌。言其志。述其情。不要作拙詩。以招謔癡。

符之誦。余又曰。誠如益軒氏所言也。我邦之人。可
學和歌。不可學詩。詩雖令人少詩。而比諸和歌。則
爲難解矣。何不學和歌乎。後入大學。學泰西之詩。
其短者。雖似我短歌。而其長者。至幾十卷。非我長
歌之所能企及也。且夫泰西之詩。隨世而變。故令
少詩。用今語。用至到精緻。使人翫讀不倦。於是乎
又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。既
而又思。是大業也。非學和漢古今之詩歌。決不可

取。乃復學和漢古今之詩歌。咀英嚼華。將已作新
體詩。而未知其成與否也。屬者、山仙士。與尚今
居士陸續作新體詩。以示余。余受而讀之。其文雖
交俗語。而平乎坦坦。易讀易解。乃歎曰。齊是哉。雖
閭里童稚。於習聞之。何難之有。且作此詩。已發舒
情志。則亦亦勝於作唐詩。以招吟癡符之誦乎。乃
與二君屢相往來。改格正調。所作不爲少。因撰其
佳者。名曰新體詩抄。是爲第一編。世之作詩歌者。

其或謂以爲鄙俗乎。雖然。自古新體詩之興。多出
于偶然。而不必係百方鍊磨之勞也。果然則此書
雖鄙俗。安知其不爲新體詩之始也。

明治十五年五月七日

巽軒居士井上哲次郎撰

新體詩抄序

人常ニ善惡是非ノ差別ヲナスト雖モ一定不易ノ理アリテ
然スルニ非ザルカ如シ其善ト爲シ惡ト爲ス所ハ其父祖ヨ
リ遺傳セル心性ト其處ル所ノ社會ヨリ受ケタル教育トニ
由テ稍規準トナス可キモノヲ心中ニ生シ之ニ依テ判別ス
ルノミ儒道ノ專ラ行ハル、邦ニ於テハ孔子ノ言フ所ヲ是
ナリトシ「モルモン」教ノ專ラ行ハル、地ニ於テハスミス氏
ノ云フ処ヲ眞ナリトス方今歐洲人ノ信仰スル耶蘇教ハ嘗
テ猶大國ノ邪教ナリキ方今我國人ノ信仰スル佛教ハ嘗テ
印度ヨリ放逐セラレシモノナリ方今世ニ行ハル、光線波

動ノ説萬物化醇ノ論ノ如キハ昔人ノ非ト為シ、所ナシ明
治ノ時代トナリテ某氏ノ為メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠
義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ某氏ノ為メニ初メテ壓
制ハ自由ノ因ナルヲ知レリ世界ノ廣キ開化ノ種々ナル仍
ホ人肉ヲ啖ヒ老者ヲ生ノマ、埋メテ是ト為スノ國ナシト
モ云フ可カラズ國ヲ異ニシ時ヲ異ニシ教育ヲ異ニシレ觀念
ノ聯合ヲ異ニスルモノトハ與ニ善惡是非ヲ語ル可カラズ
故ニ歌テ曰ク

世ノ中ハオノガ心ノスガタナリ
善キモ惡キモ外ニナクシテ

斯クハ述ルモノ、敢テ世道ノ衰頹ヲ憂ヒテ之ヲ挽回セン
トスルガ如キ大事ヲ圖ルニ非ズ唯頃者同志一二名ト相謀
リ我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルト少ナキヲ
嘆シ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ但シ
今成ル所ハ西詩ノ譯ニ係ルモノ多シ乃チ其數首ヲ集メテ
一冊トナシ世ニ公ニス是レ我輩ノ稍心ニ嘉シトスル所ナ
レ氏安ゾ知ラン世人ハ之ヲ奇怪千萬野鄙至極ノモノトナ
シテ唾棄セント然レ氏上ニ云フ如ク是非善惡ハ一定
ノ理ナク時代ノ新古開化ノ先後各人ノ信ズル所ニ隨テ異
ナルモノナレバ我輩ノ詩モ亦今世ノ人ニ容レラレザルモ

安ゾ知ラン後世ホーメルシェーキスピールトマデニコソ至
ラザレ或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一
層ノ工夫ヲ加ヘ更ニ人心ヲ感ゼシメ鬼神ヲ泣カシムルノ
詩ヲ賦シ出スニ至ラザランコト此編ヲ讀ム者須ク此ヲ諒
シテ我輩ガ素志ノ苟且ナラザルヲ曉ルベシ敢テ卑見ヲ録
シテ以テ序言ニ代フト云爾

明治十五年四月

尚令居士矢田部良吉識

新體詩抄序

唐の横町の毛唐人か云ふもの大凡物不得其平則
鳴艸木之聲聲ノ風撓之鳴水之無聲聲ノ風蕩之鳴
云々人々於之也然不得已而後言其思也存思
其哭也存懷凡出乎口而為聲者其皆有弗平者乎
と我邦もも長歌たの三十一文字たの川柳たの支
那流の詩たのと様々此鳴方ありて月を見てハ鳴
り雪を見てハ鳴り花を見てハ鳴り別品を見て
ハ鳴り矢鱈も鳴りちとすとの十分も鳴り盡
すこと能はば何んともあれハ古來長歌を以て鳴れ

るものちきりいらねども一六最と稱するといふこと
して殊に近世のまゝりてハ長歌ハ全く地を拂へる有
様にして事物の感動せしむる時の鳴方は三十一文
字也川柳也簡短なる唐詩と出掛け實に手輕なる鳴
方なるハなり蓋し其鳴方の斯く簡短なるを以て見れば
其内にもある思想とても又極めて簡短なるものたるハ疑
なり一甚た各種ある申分ハ知らねども三十一文字
也川柳ガの如き鳴方にて能く鳴り盡すことこの出来
る思想ハ線香烟花の流星位の思ひ過さざるべし少
く連續したる思想内にもありて鳴らんとせざるべきハ

固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものハあ
らす又唐風の詩を作り稍々長く鳴るもの近來
世間ハ多しとせしれども抑も詩と云ふものハ其意味
を固より大切なれども其音調の良否も又甚だ大切
なり夫れ愛別者流の漢學者ハ唐詩を作る也固より
平仄てふものあるを其詩たる通りの音律ハ叶ひたる
ことハ萬々疑ふと雖も芥子坊を以て之を呼鳴ら
せめたるんハ果して心地よき音調のものあるか將に
破録を雷木とて叩く如きものあるこのハ未だ知
らざる蓋し日本人の取つてハ支那流の詩ハ恰も

瘧の子真似若くハ操人形の手踊の如きものあり瘧
みはれまゝして瘧の真似をまゝ一人と生れて人形の真
似をまゝのもの又懶まゝにけんやそこと我等ハ連続
したる思想内にある譯をもちて心地よき音韻を
以て能く鳴らすことの出来るもののみもあつねとも全く
三十二字也堅くするも唐詩の出来ざる悔しき何
れつと腕組志しれと也より古来の長歌流新體な
とくを付けしに付けたる矢迄自分免許の鼻高々
あつて西詩を惜げなく譯を分らぬ文句にて譯し
也尚ほ拙者ものおもゆる長文句能く見れハ

新體と名をとりて新ふ蘭ゆれと

やより古體の大俳の法螺

法螺と知りつて古を我よりまゝん下心笑ふことハ
云ふつけられ法螺ハ我より始すれものみあらぬま
たしもそのまゝなることハ假令法螺でもあ
まそあし唯一人は異なる人の鳴らんとする時ハ志
也れた雅言や唐國の四角四面の字を以て詩文の
才を表はれを我等ハ組みまゝりてハ新古雅俗の区
別なく和漢西洋ごちやせめて人々分るる事專と
人々分るると自分極め易く書くものハ一つの結見

識高き人たつち可嘆しちものて笑ひ笑ひ語ふ
云ふ慕念ふ虫を好ましくなぬ人多くの人の其
中一人自分極の我等の羨望を賛成する馬
鹿ありて世を安んずるを知らん我等のちんぷん
の寝言とてを遂に今日の唐詩の如く人々の
てはやさるゝことあるを究賢

明治十五年五月、山仙士外山正一撰

柳田泉庵



凡例

一均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ
之ヲ詩ト云ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ
歌ト詩トヲ總稱スルノ名アルヲ聞カズ、此書
ニ載スル所ハ、詩ニアラス、歌ニアラス、而シテ
之ヲ詩ト云フハ泰西ノ「ポエトリ」ト云フ語
即チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、
古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ、
一和歌ノ長キ者ハ、其體或ハ五七、或ハ七五ナリ、
而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ

七五ト雖モ古ノ法則ニ拘ハル者ニアラス、且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ、

一此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分チテ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ倣ヘルナリ、

一詩歌ノ初メニ往々序言ヲ附スルハ嘗テ新聞雜誌ノ類ニ掲ケタル者ニテ、其事頗ル詩學ニ關係アルヲ以テ復タ之ヲ此ニ掲ケ、敢テ其煩ヲ厭ハス、看官幸ニ之ヲ諒セヨ、

明治十五年五月

編者識

目次

ブルウムフェールト氏兵士歸郷の詩(山仙士)	一葉
カムプベル氏英國海軍の詩(尚今居士)	四葉
テニソン氏輕騎隊進撃の詩(山仙士)	六葉
グレート氏墳上感懐の詩(尚今居士)	九葉
ロングフェルロト氏人生の詩(山仙士)	十六葉
玉の緒の歌(巽軒居士)	十九葉
テニソン氏船將の詩(尚今居士)	二十二葉
抜刀隊の詩(山仙士)	二十五葉
勸學の歌(尚今居士)	二十八葉

チャールズキングスレー氏悲歌(山仙士)	三十葉
鎌倉の大佛小詣で、感あり(尚今居士)	三十三葉
高僧ウルゼーの詩(山仙士)	三十六葉
シャルドレアン氏春の詩(尚今居士)	三十八葉
社會學の原理小題す(山仙士)	三十九葉
ロングフェルロー氏兒童の詩(尚今居士)	四十三葉
シェーキスビール氏ヘンリー第四世中の一段(山仙士)	四十五葉
シェークスピアル氏ハムレット中の一段(尚今居士)	四十八葉
シェーキスビール氏ハムレット中の一段(山仙士)	五十葉
春夏秋冬の詩(尚今居士)	五十二葉



新體詩抄初編



ブルウムフキールド氏兵士歸郷の詩
 涼しき風小吹かれ
 椅子よもたれてあるさまは
 その座を志めし腰掛の

外山正一
 矢田部良吉 全撰
 井上哲次郎

ありし昔の我父の
 實よ心地克くありよける
 堅く作れる臂掛り

よそぢの昔荒くと
 猶ありくとみゆるかり
 元ふかいらぬ其音色
 満る思は猶切よ
 忘れんとて忘れず
 後ふ掛し古畧曆
 ひらくくと誘はれて
 嵐ふ逢ふて翻へる
 一枚は、り又下一
 数も合せて二十年

刻みのこせる我名前
 柱よ掛し古時計
 聞きて轟く我胸ふ
 えりさく如く堪がたし
 嗟歎ふ堪へぬ其時ふ
 忽ち寄るそよ風よ
 上るは是ぞ陣前り
 小幡とふそ見ゆるかれ
 下りて落るその紙此
 故郷をはふれ遠國ふ

暮せる年の數取りぞ
 来たる一羽の知更鳥い
 我をつらく不審顔
 はよかむ如く見へよけり
 嗚呼老ひたりや老ひよけり
 昔の友ふあらぬかと
 斯く心中ふ彼是と
 眺ふあがめつくくと
 苔の席を眺むれむ
 其美さあてやのさ

折しも家の入口へ
 人よ狎れたる鳥かれど
 怖づるが如く且つを又
 口よ云いねどそのふりの
 それふ居いする武士は
 尋ねる様ふ見へりけり
 物を思へる其間
 窓の限ふ織ふせる
 緑の色の青くと
 又と類いあらなくふ

是も誰がわが^と稚子の
敷て樂むものありと
思ひい更よいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと計ふ啼きよけり
あゝ我ながら愚まゝと
過き越し方をさまよく
辱しく又口惜しく
軍の神をのゝ忘れり
可^お惜勇士の失せぬるは

あゝたゆふべの手をさみよ
推量それいといなほ
胸のそゞろよ塞りて
前後を知らむ立上り
稍時ありて心付き
再び椅子よつくくと
思ひつゝ、けて按ぞれを
意はず髪も逆立ちて
名譽の淵に落ち入りて
實よ傷敷き事ぞかゝ

殺傷放火分捕の
今更思ひめくらせむ
我身を守るたうらぞと
我身の罪をさねたる
恨いいとゞいやまされ
二人の影を見ゆるなる
あらしの老と見受けたれ
計らぬめぐり逢ふ坂や
せき来る涙關あへず
嬉し泣きふを泣きよける

其有様を熟くと
あらし恐ろしやむごたらし
頼み頼める劍あつ
仇と思へばなほさらふ
聲するかたをうちみれば
此影こそい稚子と
やがて入り来る我父い
我子の顔を一目見て
我を抱きて老いの身の
そが傍にゐる

目元涼しき小女子小	腰打屈ら老人の
これナンサーと手を取りて	口を合はすもあまる愛
こ、小居やるのやうくと	イスパニヤより歸國せる
そなたの伯父のチャレぞと	云へば女も近寄りて
志らもの如き指をあげ	いと曇れる老の眼を
そと打弾きぐわんぜかく	笑ふ姿の可愛ゆらく
嗚呼我ながら愚なり	身の上ばかり斯く長く
繰返へまこそ無益かれ	それお付きても兎小角小
此老卒ぞ幸多き	浮世の中お今いまた
心よ掛る雲もかき	

カムプベル氏英國海軍の詩

尚今居士

イギリス國の海岸を	固く守れる水兵よ
一千年のその間	汝が建つる大旗は
戦争のみ嵐をも	支へ得たれば此後を
敵を受くともたゆみなく	勇氣の限りひるがへせ
軍烈しくあらむあれ	嵐も強く吹かば吹け
立ちくる海の浪間より	汝が祖先あらはれて
汝を援けたまふべし	益く祖先の軍艦の

其甲板かぶたひてがらの場

大子おとこルソろンヤブレいキ乃

軍烈いくあらばあれ

大海原うみの其墓場

死かふ一處ところの人のぶ

嵐あらしを強く吹ふのバ吹ふけ

四方海よこあるブリタニヤ

山やまとたちくる波なみとて毛

慣れて我家うちの異ちがあらず

船ふねより放はなち轟とどろく

軍烈いくくあらばあれ

とりでを城しろも用もちいあし

千尋せんのその淵ふちとて毛

いかづちあせる大砲たいを

波なみをわけつ、進すすみ行く

嵐あらしを強く吹ふのバ吹ふけ

國くにの光ひかりとたてし旗はた

危難あやしみも都みやこて解とけ去いりて

其時そのとき汝おまえついのもの、

歌うたふ唱となひて悦よろこびて

烈いくき軍いくきみし時とき

益えき、光ひかりり輝かがきて

太平たいへいの日ひふ毛どるらん

いさほし譽ほめて諸人しよじんが

安樂あんらく限りあゝるらん

強つよき嵐あらしのやみし時とき

左の詩ハ一千八百五十四年英佛の兩國土耳其
を援けて魯西亞と兵端を開き遂に高名あるク
ライミヤの戦争となり此間數多の合戦此處彼
處に在りたる中最有名なるものハ同年六月廿
五日バラクラバの戦争にて英國の輕騎隊六百
騎が目よ餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無雙
の手柄を顯はしたれども惜以哉衆寡素より敵
に難く其大概ハ討死し或ハ擒ふせられ無難に
歸陣したる者甚僅よて有きと當時英國ハ有名
なる詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟味し

たる者よして何國人ハ限らむ苟も英語を解以
るもの此詩を暗誦せざるなりといふ

テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩

其一

一里半なり一里半 並ひて進む一里半
死地よ乗り入る六百騎 將ハ掛れの令下は
士卒たる身の身と以て 譯を糾まハ分あらむ
答をたはも分ならず 此れ命これよ從ひて
死ぬるの外ハあらざらん 死地よ乗り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ	前も左りも又筒ぞ
共よ打出は砲聲ハ	天小轟くいつちの
響の如く凄まじや	彈丸雨飛の間小を
猛り立てぞ進むふる	死地よこそ入れ鰐の口
勇んで乗り入る六百騎	

其三

抜けば玉ちるやいばをむ	皆をろ共よ振あげて
きらくくくと輝けり	敵陣近く乗り掛けて
大砲方をふで切りは	最と目冷しき働きぞ

烟の中よ飛込みて	烈しく陣を破るあり
太刀の早業見ごとなり	敵の軍勢たぢくと
遂ふさふふる事からば	むらくくむつとむらくづれ
馬の頭ぞ立直す	以前よ進みし六百騎
残るいとわげりあり	

其四

右を望めむ大筒ぞ	左りも後をも又筒ぞ
共よ打出す砲聲ハ	天小轟くいつちぞ
彈丸雨飛の其中よ	從横むどん切り靡く
死地より出て、乗り歸へ	鰐の口より脱れ出て

歸るゝ元の一里半 六百人の其中で
残るゝいとわづらあり

其五

あゝ勇まほきものゝふの よふ香しき其譽
手柄の永く傳へなん 今のときあご生立ちて
とる年あまた重りて 腰の梓の弓とあり
頭ふ霜を戴きて 孫ひこやど多き時
六百人の豪傑が 敵の陣へと乗り入れる
そのふる事を語りあは 末代までも名の朽ちじ

我國ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚ダ少
ナシ蓋シ其趣向ノ我詩歌ト同ジカラザルカ為
メナルベシ又適翻譯スル人アルモ之ヲ支那流
ノ詩ニ模擬スルガ故ニ初學ノ輩ハ解スルコト
能ハス余之ヲ慨スル久シ以為ク西洋人ハ其學
術極メテ巧ニシテ精粗到ラザル所ナシ其詩歌
ニ於テモ亦之ト均ク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ
穿テ讚賞ス可キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシ
テ韻ヲ踏ムモノアリ踏マザルモノアリ緩漫ナ
ルモノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化殆

ド捉摸ス可ラズ而シテ其言語ハ皆ナ平常用ッ
ル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラズ又
千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カズ故ニ三尺ノ童
子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解
スルヲ得ベシ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ好マザ
ルニハ非レドモ亦長篇ヲ尚ビ尋常ノ日本書ノ
如キ薄キ冊子ヲ以テスレバ一篇ニシテ十餘冊
ニモ上ルモノ少ナシトセズ頃口學友、山仙士
ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ
試ニ西詩ヲ譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ乏シト雖

天既ニ譯レ得ル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ
舉ゲテ江湖諸彦ノ高覽ニ供ス幸ニ其詞藻ノ野
鄙ナルヲ笑フナカレ

尚今居士識

山々ろほみいりあひの 鐘ありつゝ野の牛の
徐歩歩み歸り行く 耕へる人もうちつあれ
やうやく去りて余ひとり たそがれ時ふ残りけり
四方を望む夕暮の 景色はいとゞ物寂し

唯この時不聞ゆるい 飛び来る蟲の羽の音
遠き牧場のねやふつく 羊の鈴の鳴る響

猶其外不常春藤しげき 塔よやどれるふくろふの
近よる人をいれし見て 我巢不寇をいれものと
訴へんとや月不鳴く いとあわれよも聲にあり

かくこふい掄又ふよ あら、ぎの木ぞ生茂る
其下かけふうづだうく 苔むす土の覆ひたる
壙よ埋まれこの村の 古人長く打眠る

のきの燕もふいとりも 木魂不響く角笛も
あさばらけよぞかりぬれば かまびすしくいありつれど
冥土の人の眠をば 覺はことこそなうりけれ

死ふたる人のはかあさよ 身と暖むる爐火も
妻のよなべも誰が為めぞ 爰るわらべがのたまどふ
爺の歸りをよろこびて 小膝よまがるまともあし

曾てこの世不居し時い 麥も小麥も其鎌り

山もはたけも其くそふ 手荒き馬も其むちよ
繁れる森も其斧に まあせて君が儘ありき

功名とても浮雲の 過るが如きものふれむ

この古人の世の益と ほねとりまらも不運をも
わびーき妻子の暮ーをも 笑ふべきふいあらばうし

富貴門閥のみふらば みるうつくしきをとめこも

浮世の榮利多けれど いつの無常の風ふらば
草葉の露しれろかふり 黄泉入るの外ぞあま

苔ふりもれー古人の 墓場の上ふ寺をたて

あたりまばゆき屋の内ふ 頌歌の聲も合はるる
樂器の音を聞ぎとも 身の不徳とふ思ひそよ

ひつぎ肖像美を盡し 人の尊敬多くとも

ひとたび絶えー玉の緒を つまぎとむべき術のな
へつらふ人のほめ言も 長き眠の覺はまー

考へみれば廢れたる 此古墳の古人を

世よきぐれたる量ありて 國を治むる徳を具し
詩文の才も多けれど あらはれざりて失せける歎

學びの海い廣けれど わたる船路を知らざれば

心の性い賢きも 身の賤しくて貧乏れを
世のはまれをい聞かざりて 空しく鄙ふ終りけり

深き水底求むれを 輝く珠も有るぞか
高き峯をい尋ねれば かをら水草の多けれど

千代の八千代の昔より 人ふ知られで過ぎふけり

實ふ此墓に埋もれて 業いおとろもハムデニ
詩の拙くもミルトンハ 國小軍を擧ぐとを

クロムエルふも比ふべき 人のかいね々あるあらん

議院の議士を服さしめ 人のたどりも外に見る

國の安危を身小委ね 高き譽望を民ふ得る

此等のわざいおしあべて 古人何ぞあづからん
恵みいひろく及ばねど 又常々のふるまひふ

不徳もいと少ふしや 人を殺して王とあり
民をかやめて利をおみは 夢よもみまどさることは

まこととかくほそら言ふ 恥ると忍ぶ心の苦

且つ巧ある詩文もて 富貴お媚る世のあらひ
是の都の弊おれど 未だ此地よ及ばさ

此處よ生れて此處よ死ふ 都の春を知らざれば
其身の淨き蓮の花 思ひの清める秋の月

實お厭ふべき世の塵の 心お染みしことぞあま

されど收めしあまがらの ころしの爲と側近く
建し石碑の今もあり 文の拙く彫りざまの
醜しとてをたび人の 憐を争で惹おざらん

碑面おえれる名よ年齢ふ 記し、文字の拙くも
記念の功の有ぞか 又有がたき經文の
文句を引きてえりたるを 人お無常を論は為め

蓋し此世お生れ來て 程おく死るその時よ

別れの惜しきこともなく
心の外ふ打捨て、
浮世の花の榮を去り行く人のあうるべ

眼の光り止むときは
たましい體を去るとき
たとい焼くとも埋むとも
戀こゝるらん身のやから
いたく慕はん妻子ども
人の思ひの消えいせド

偕又此ふ古人の
いつか歸らぬ旅ふたち
如何せしやと思ひやり
いれい書けど余とても
過ぎ行く後の世の人の
たづぬることもあるならん

こからん時の此さとの
老人斯くぞ曰ふならん
昇る旭を見らやとて
頭ふ霜を重ねたる
我儕い彼れが朝早く
岡ふ登るを常よ見き

又彼處ある川ばたの
わだかまりたる根の側り
流る、水よ打臨み
杖伸び垂れし山毛櫨の木
身を横たへて晝いこひ
其常あきをかこちけん

又彼處ある常葉木の
木立の下ふさまよひて

かしら傾けうでを組み
どっかぬ戀の口惜しさ

知る人あきの歎のしさ
世のうさ杯をかこちけん

さるふひと日い彼の人を

慣れし岡ふも樹陰ふも

絶て見ることあかりけり

其翌朝ふありぬれど

野ふも森よも川邊ふも

身をば現いすことぞあき

又其次の朝ぼらけ

屍送る歌まきけりば

まさしく彼の爲めありき

君の字を知る人なれば

彼の山櫃まがらの陰ふある

碑文を讀みて識りたまへ

碑文

土ふ枕しこの下ふ

身をかくしたる若人は

富貴名利もまだ知らむ

學びの道も暗けれど

あはれ此世を打捨て

あの世の人とありふけり

仁惠深き人あれば

天も憫み報ひけり

憂き人見れば涙ぐむ

(外よ詮すべあき故よ)

ひとりりの友のありしとよ

(外よ望みはああるらん)

これより外み此人の 善一悪し共ふあ不深く
尋るとても詮いあ一 たましくひ既よ天よ歸し
後の望みといだきつゝ、 神よまぢあく侍るあり

ロングフェルロー氏人生の詩

山仙士

そも靈魂の眠るのい 死ぬといふへきものぞか
人の一生夢ありと あいれあふしでうたふあよ
眠らふや夢い見ぬものぞ 此世の事い何事も
夢とおもへどさふあらざ

人の一生夢あらば 最とたしあふる事ぞか
人の終い墓なくも 墓ふうづまるものあらざ
土より来り又土ふ 歸ると云ふい肉體ぞ

そりや靈魂の事ふらぞ

此世ふ在りて樂むも
世よある趣意よあらざらん
日毎くよ怠らぞ
功を立てねばあらぬぞよ

又苦しむを固と人の
生るの役ふ立つ為ぞ
今日の今日丈け一日の

光陰實り箭の如く
心の如何ふ猛く共
送葬大鼓打つ胸の

藝道最とも易からぞ
墓ふく進む葬禮の
音止めされたる大鼓の音

最ともあられよびくらん

此世の中の戦争ぞ
人ふ生れた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるを
功名手柄ふまべまぞ

其戦争の中ふ居て
人ふ使われ追をれは
人ふ芳らぞ憤發し

如何ふ樂しくおもふ共
如何ふうれしくありつとも
働くべきの現在ぞ

未來のあてふまべあらば
過去のむろこふ過し事
其働を見る者の

胸の心と天の神

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なきものあらば
稀なる譽得るならば
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめぐらせば
人ふ勝れし手柄して
名は香しく後の世に

其香しき名を聞ひば
艱苦辛苦の浪風ふ
助け船さへあらぬ身も

社會の海に乗り出して
吹き廻りされて破船して
氣を取り直し憤發し

功名遂ぐる者あらん

されば人々怠たるを
運命如何よつたなきを
たゆまざれば自若とし
勤め働くことをせよ

暫時も猶豫をるあかれ
心を落しことあられ
功名手柄あしは、を

余蚤ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ其容
易ノ業ナラザルヲ慮リ先ツ和漢古今ノ詩歌文
章ヲ學ビソレヨリ漸次ニ新體ノ詩ヲ作ルノ路
ヲ為サントシケルニ一日尚今居士ハムレツト
ノ譯詩ヲ示サル其文俗語ヲ交フト雖モ反リテ
古歌ヤ漢詩ノ解シガタキニ勝ル因リテ余之ヲ
歎賞シテ學藝雜誌第六號ニ載ス次イテ山仙
士モ亦ハムレツト并ニカーヂナルウルシ一等
ノ作アリ是ニ於テ余思フニ古今ヲ問ハズ東西
ヲ論セス凡ソ新體ノ詩ノ流行スルハ大抵偶然

ニ出ツル者ニテ必ズシモ百方鍊磨ノ勞ヲ俟タ
サルナリサレバ尚今居士、山仙士ノ作ル所モ
新體ノ詩ノ始メナルヤモ知ルベカラズ乃チ自
カラロングフエロー氏ノ玉の緒の歌ヲ譯シニ
君ヲシテ新體ノ詩ヲ創造スルノ功ヲ專ラニセ
シメガラント欲ス余ノ作ル所略ニ君ニ同ジ但
ニ君ハ韻ヲ踏マス余ハ試ニ韻ヲ踏ム是レ其差
ナリ或ル人余ガ譯詩ヲ見テ大ニ笑フ蓋シ或ル
人ノ如キハ文學ノ盛衰興廢スル所以ヲ知ラザ
ル者ニテ深ク尤ムルニ足ラズ夫レ明治ノ歌ハ

明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所以ナリ、若シ夫レ押韻ノ法、用語ノ格等ハ、次第ニ改良スベキノミ、一時ニ為スベカラズ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ、

巽軒居士識

玉の緒の歌(一名人生の歌)

眠むる心の死ぬるあり、見ゆる形のおほろなり、あすとも知らぬ我命、あいはのふき夢そかしくなど、あられふいふの悪し

我命こそまことあれ、我命こそたしかあれ、墓の終りの場所あらむ、人の塵ふて又散るといふからだのうへのこと

人の願ひの喜か、人の願ひの悲か、人の願ひこれあらむ、唯怠たらずはたらきて今日よりまさる明日とまで

業の久しく時の馳す、強き胸たも亦たえむ

鼓の如く撃ち続け 一日く子ちりくある
死出の旅をぞいやすある

争ひ多き世の中ふ 此身を寄せて先鞭ふ
ありてまきく進むべし 言ふき啞とある勿れ
牽かる、牛とある勿れ

如何ふ未来の樂しきを 如何ふ空しき過去あるを
共ふ之を捨ておきて われを忘れず神を知り
はたらくべきの今日をり

すぐれたる人世ふ多く われとても人相同ド
勉め勵まば斯くあらん ゆめ急らば勉めあは
長く残さん此名をぞ

海より荒き世の中ふ 舟失ひて波の間ふ
獨漂ふ我友は 我名を聞きて勇まらん
我名を聞きて進まらん

さすれば人の氣を張りて 事業ばかりふ心して

如何ふる運も事とせむ
樂あるぞはたらけよ

高きふ至れ馳せゆけよ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

テニソン氏船將の詩(英國海軍の古譚)

尚今居士

暴威を以て下を馭す	人ハ此世の鬼ふるぞ
天地も容れぬ罪あるよ	其過ちの深きこと
阿鼻の地獄も及ばざら	若しや今しも壓制を
嗜まんもの、あるあらば	わが此歌をよく聽て
其身を深くいましめよ	曾て勇々 <small>ま</small> き武士 <small>の</small>
將たる船の乗組ハ	自由の空氣吸ひかれし
英吉利國の人なれど	勇のみあらば信あれど
其船將の壓抑を	深く怨みて措のむとよ

將が性質猛くして 慈愛の心露ほども
 無きのみあらば針不どの 罪も厳しく糾し問ひ
 免そことあし斯てせふ 將が暴威いひやつのり
 船人どもの心中よ 燃る怒のそのほの不
 消るひまなくまうくよ をりさへあらば燃え出で、
 人とも身とも、ろ共ふ 焼うんとすふり然れども
 船將常ふ望むらく いつか勲功あらはして
 わが船の名を轟かす 古今未曾有の英雄と
 千萬人よ呼ばれんと 一途ふこ、ろ傾けて
 湊よ過り岡ふ浴ひ 岬を廻り島を歴て

北ふ南ふ何處となく 残るくまなくたゞ渡り
 大海原の真中ふて 北をはるかよ眺むれば
 帆を打揚げて来る船は 是ぞ正しく佛蘭西の
 軍の船ふまぎれなき わが船將の面^ま色は
 喜び外よあらわれて 言葉も心といそがはくし
 船人ども、銘々の 心ふたくみありければ
 眼の中ふかのづから 喜ぶ色の見えたりし
 將の聲色高らうふ 毛のども船を追ふべしと
 一と號令を下はま、 風ふまかせて我船を
 敵ふまちかく進みゆく 出、ふ乗組一同は

常小怨みく大將を
大砲はなつものいあし
實ふいかつちの落るごと
天地も破裂するばかり
帆架もわれてこそ微塵
銃丸繁くふりきたり
甲板のみか帆柱を
生きとー生けるもの共は
もの言ふこともかあねば
見合に姿凄まどく

みらみて腕を又きて
されど敵の大砲は
轟きわたるおそろしさ
横木も折れて波も落ち
甲板裂けて容なく
雨うあられお怖ろしや
人の脳やら血汐やら
右ふ左よりうち倒れ
倒れーま、小顔と顔
血汐の中よ玉の緒の

絶えんとしつ、船將を
嘲り笑ふ氣色あり
頼みー人もことごとく
われを賣りしぞ口惜き
辱と恚のせりあひひ
齒うみとあして叫べども
かばねの上よ倒れけり
實よ怖るべー悪むべし
失ひーこそはかあけれ
經ぬといへど船將や

見うへる眼おのづあら
將の功名立てんとて
我を嘲りみらみつ、
心のうちい堪へられぬ
顔色青く赤くあり
終小痛手の痲かひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらふ
其のち多く年月を
船人どもの志うねを

水層とありて海底ミヅノも 今も沈みて残るらん
さりと見えぬ波の上り 浮べる 鷗ウ二三 四

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

西洋ふての戦の時慷慨激烈なる歌を謡ひて士
氣を勵ませることあり即ち佛人の革命の時「マル
セイエーズ」と云へる最と激烈なる歌を謡ひて
進撃し普佛戦争の時普人の「ウオツキメン、オニ
ゼ、ライン」と云へる歌を謡ひて愛國心を勵ませ
し如き皆此類あり左の抜刀隊の詩に即ち此例
ふ倣ひたるものなり

抜刀隊

山仙士

我の官 軍我敵の 天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たる者は 古今無雙の英雄で
 之よ從ふ兵つとむの 小慄悍決死の士
 鬼神ふ恥ぬ勇あるも 天の許さぬ叛逆を
 起し、者い昔より 榮えし例あらざるぞ
 敵の亡ぶる夫迄い 進めや進め諸共ふ
 玉ちる劔抜き連れて 死ぬる覺悟で進むべし
 皇國の風と武士の 其身と護る靈の
 維新このかた廢れたる 日本刀の今更り
 又世ふ出づる身の譽 敵も身方も諸共ふ

刃の下ふ死ぬべきぞ 大和魂ある者の
 死ぬべき時い今あるぞ 人ふ後れて恥かくふ
 敵の亡ぶる夫迄い 進めや進め諸共り
 玉ちる劔抜き連れて 死ぬる覺悟で進むべし
 前を望めば劔あり 右も左りも皆劔
 劔の山ふ登らんを 未來の事と聞きつるに
 此世よ於てまのあたり 劔の山ふ登るのを
 我身のあせる罪業を 滅す為よあらばして
 賊を征伐するが為 劔の山もふ人のその

敵の亡ぶる夫迄の	進めや進め諸共小
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべし
劔の光ひらめく	雲間小見ゆる稻妻か
四方小打出す砲聲は	天 <small>子</small> 轟く雷か
敵の及小伏せ者や	丸小碎けて玉の緒の
絶えて墓なく失する身の	屍 <small>の</small> 積みみて山とあし
其血 <small>の</small> 流れて川とあす	死地 <small>よ</small> 入るのも君が為
敵の亡ぶる夫迄を	進めや進め諸共小
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべし

彈丸雨飛の間小も	ニツなき身を惜まを小
進む我身 <small>の</small> 野嵐小	吹かれて消ゆる白露の
墓なき最後とくるとも	忠義の為小死ぬる身の
死 <small>て</small> 甲斐あるものあらば	死ぬるも更小怨ふ
我と思 <small>ひ</small> 人々たち <small>の</small>	一歩も後へ引くふかれ
敵の亡ぶる夫迄 <small>の</small>	進めや進め諸共小
玉ちる劔抜き連れて	死ぬる覺悟で進むべし
我今茲小死人身 <small>の</small>	君の為あり國の為

捨つべきもの命あり
忠義の為ふ捨る身の
永く傳へて残るらん
義もあき犬と云へるな
敵の亡ぶる夫迄ハ
玉ちる劔抜き連れて

假令ひ屍ハ朽ちぬとを
名ハ芳しく後の世ハ
武士と生れた甲斐もあ
卑怯者とあそられそ
進めや進め諸共ハ
死ぬる覺悟で進むべ

勸學の歌

昔ハ唐土の朱文公
わら學問をす、めんと
一生涯ハ春の夜の
國の東西世の古今
學の道ハ就くものは
同一多少の感慨を

よハ博學の大人ああら
少年易老の詩を作り
夢の如くと嘆きけり
人の高卑を問ハて
いりハ才能ありとて
起さぬことのあるべ

春の初花秋の月 夏のみどり葉冬の雪
渾て此世の物事ふ 心をとむる時あらは
わが學藝を省みて 過る月日を思ふべし

池のみぎいの春草の みどかき夢も覺ぬまふ
軒端ふ茂るまりの葉を 吹く秋風ふさそをれて
此年も半ば過ぬるを ふみ讀む人へしらむやい

年の月日を長けれど 難波入江の村あとの
ひとよの如く思はれて わが身の上のはつあしき

螢や雪の光りふて ふみの讀めども業あらは

昔の人の學問の 唯一すぢの道おれど
おほ賢人の嘆きあり 今の學術多端ふて
枝ふ小枝ふ末葉まで いろで凡夫の能すべき

さい云ふもの、諺ふ 山のはとめの一塊土
海のはとめいひと一づく いかふ急げど詮いなき
心をこめていつまでも 急らぬこそよかりけれ

たとい多くよわたらぬも
身の為とある多からん
蜂不能あり蜜つくる

唯一藝を修めあむ
蜘蛛ふ藝あり網をはり
何とて蟲よ及ばざる

勉め勉めよたゆみなく
難き事とて厭ふなよ
教の山ふ志をりあり

進み進めよよどみなく
學の海ふ舟路あり
丈夫何りも怯るべき

チヤールス、キングスレー氏悲歌

山仙士

無常を告ぐる入相の
三人の漁夫の帆を上げて
走らば船を進めども
心の中は皆同ト
おきふ向ひてゐる
まうけの薄く子澤山
洲ふ打掛くる浪音の
かせがふやあらぬ男の身

鐘の音をるたそがれふ
入る日を指して西の海よ
妻子の為ふ引かさる
父の出船を眺めつゝ
童子の外ふ餘念なく
雨の降る日も風の夜も
最とまさまトき其時も
袖のひぬの女子の身

三人の漁夫の妻三人
鐘も不のかふ聞ゆれむ
火を挑んと立寄りて
窓の戸開けて眺むれば
空打過ぐるむら雲の
暴風の如何ふ吹けばとて
洲ふ打掛くる浪音の
あせがよやならぬ男の身

日も西山ふ入相の
共ふ籠りし燈臺の
つまめる心の夫思ひ
驟雨やら暴風やら
色黒くと物をごとく
水かさの如何ふ増せばとて
如何程すごとく聞けばとて
袖のひぬのも女子の身

朝日かやく砂磯ふ
残るの三つの屍ぞ
歸らぬ旅ふ門出して
髪振り亂し取まがり
目もあてられぬ風情まり
袖のひぬの女子の身
一日も早く樂をせん
寄せ来る浪のくだけた

潮引き去りて其跡ふ
三人の漁夫の妻三人
歸らぬ夫のあきがらふ
消る計ふ啼き入て
かせがよやならぬ男の身
一日も早く世を去れば
屍の跡の砂磯ふ
鳴りたきや鳴れよる儘よ

西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フ
ル所ノ言語ヲ以テ詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感スル
所ヲ直ニ表ハスニアラザルナシ我日本ニ於テ
ハ往古ハ此ノ如クナリト雖モ方今ノ學者ハ詩
ヲ賦スレハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ援キ
平常ノ言語ハ鄙ト為シ俗ト稱シテ之ヲ採ラズ
是レ豈謬見ト為サツルヲ得ンヤ
夫レ我邦人ノ漢學ヲ修ムルヤ殆ト皆ナ所謂變
則ナルモノニシテ漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ讀
下スルモノ甚少ナシ然シテ韻書作例等ニ因テ

平仄韻字ヲ學知スルモ之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ
當テハ既ニ本音ヲ發スルニ非ザレバ到底室内
ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔靴ノ憾ナキ能
ハズ何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナ
ルハ素ヨリ望ム所ナレ氏音調ノ宜シキヲ得ル
ト亦極メテ肝要ナレバナリ而シテ音調ナルモ
ノハ自國ノ語又ハ他國ノ語ナレバ其音聲ヲ曉
熟スルニ非ザレバ其真趣ヲ翫味スル能ハザル
ヤ明ケシタトヘバ變則流ノ洋學書生ガ辭書ニ
據リ作例ニ從テ音聲ノ強弱ヲ學ビ詩ヲ賦スガ

如シ誰カ其迂ヲ笑ハザラン又古言雅言ヲ以テ
長歌短歌ヲ作り並フルモ吾人常ニ用ヒザル所
ナレバ稍外國語ニ類スルガ故ニ之ヲ以テ精密
ニ我衷情ヲ據ベ我思想ヲ揆スコト或ハ難カラ
ン
果シテ然ラバ余以為ク宜ク平常ノ語ヲ少シク
折衷シ以テ稍新體ノ詩歌ヲ作り充分ニ吾人ノ
心ニ感スル所ヲ吐露スベキナリ然レ氏之ヲ言
フモ為サレバ人或ハ目シテ妄誕漫言ノ徒ト
為サン故ニ余謏劣ヲ顧ズ頃者試ニ西洋ノ詩數

首ヲ譯シ既ニ其一ニ新聞雜誌ニ載セシトア
リ今復此新紙ノ餘白ヲ借テ拙作ニ首ヲ掲ゲ江
湖諸彦ノ一粲ニ供ス其一ハ自作ニ係リ但シ始
ノ一節ハ大佛財法日課勸進之序ヲ取捨シテ作
レルナリ其一ハ西詩ノ譯ニ係ル余素ヨリ文事
ニ疏ク詞藻ニ精シカラス江湖諸彦ノ幸ニ我微
意ヲ諒察アラシク乞フ

尚今居士識

鎌倉の大佛小詣で、感あり

今をさることかぞふれを 六百年の其むか

建長のころ鎌倉ふ
 總青銅の大佛の
 相好いと圓滿
 何れの地ふも比類なく
 由井のつあみの難より
 紫磨塗仙も雨ふ濡れ
 殆ど此より四百年
 余もこのまろ鎌倉の
 杖を引きは、大佛ふ
 稲多野局が建られし
 御身のたけい五丈ふて
 見者無厭の尊容は
 さるより明應四年とや
 大殿破壊の其後を
 風小暴されたまふこと
 こいふれ人ふ聞くところ
 古跡尋ねてをちこちと
 詣で、心たちつけて

しかと尊顔見上れを
 浄き如来の御心は
 涅槃てふ語の思ひれて
 一をくの間胸の雲
 真如の月の圓かある
 見たるが如き心地せり
 夫れ物事のありたちは
 昔一羅馬の帝国の
 起りしものふあらせり
 はちすの花もかよびあき
 外ふ見ひれ何とあく
 凡夫不覺の余とても
 霽れて無明の夢の醒め
 影を見たるふあらねども
 頓ふと、のふことぞあき
 シーザルひとり智を奮ひ
 徳川氏の繁昌の

家康ひとり徳ありて 成りしものとあ思ひそよ
時勢人情やうやくふ 運びて此に至りてき
鎌倉山の^{大佛}も 浮屠氏の教へ渡り来て
千百年を過ぎし後 人の信仰厚くあり
鑄もの、術も具りて 初めてありしものまらん

稲多野夫人の時代よ、 此大佛ふ打向ひ
精神こめて手を合せ 天下太平安穩と
わが後生とを祈りしも 今の明治の聖代ふ
生れし人の然りせむ 佛の面を打眺め

昔の事を思ひやり 其鑄江の巧みふる
業と不むるの外いふし かねればあはる時勢かな
秋の空ふも劣るまど

昔の人の是といひし 事も今での非とぞふる
今日の真いあはれの偽 あはれの教いあさつゝの
非理邪道とあふるならん 天地萬物一定の
規律ふ由りて進化すと 學者の謂へど是を之れ
駁と心ふ認めたる 人の果してありららん

嗚呼盛んある大佛よ 六百年もたつた川
からくれお方のもみぢ葉と 流る、水を年々ふ
人の譽むるふ異あらず 尊體此處に在まは間は
如何小時勢の變るとも 年々人の尋ね來て
歎賞せざることおけん

此篇は高僧ウルゼー初め王の寵愛を得て
大權を握り威を海内ふ振ひ其富王室ふ劣
らざるふ至りしも忽ち王の意ふ戻り官職
を奪ひれ所有を没收せられたる時世運の
定まりふきを嘆息する所ふして頗る有名
の作あり

山仙士

おさらばさらむいざさらば 再び會ひぬ暇乞ひ
榮譽ふ永く別るべし 人の習ひ皆都て
利運の端の芽出くなむ 八重咲きよふふ花盛り

位ふ位重ふりて	榮曜榮華を極むれを
愚ふ胸ふ思ふ様	運命強く願かふひ
天ふも登る龍ふりと	悦びいさむとろかさよ
冬や、深く置く霜の	情け用捨も荒野原
根までを枯らば霜枯ふ	運極いまりて身の墮落
見るも慙れふ有様は	我が今日の身の上ぞ
永の年月心なく	名譽の海ふ浮べらひ
浮袋ふてうかくと	遊ぶ童子ふ異ふらば
杖の立たざる淵ふ入り	飽まで強き我が意地も
こらへをふせば張り裂けて	勞れいてたる精神よ

忠を盡して年寄れる	其の甲斐もふく今いそや
身の零落よ涙川	水屑とこそ成るべけれ
浮世の虚飾や譽れ程	忌むべき物いあらむか
今ふ至りて我が胸ふ	初めて悟る所あり
廣き世界の其内で	王者の機嫌取り取りよ
此世を渡る男ほど	憐むべきい無きぞか
願ふ所の其笑顔	恐る、所の其不興
彼と是との氣がねて	憂さ恐怖さの數々の
軍はるより尚ほ多し	女子の機嫌取るふ増は
遂よ零落せる時を	天より落るルシフアなり

親骨言不糸

再び浮ぶ瀬をあらは

再び浮ぶ瀬をあらは
（Faint bleed-through text from the reverse side of the page is visible in this area.)

シヤール、ドレアン氏春の詩

尚 今居士

春の景色の、どけさを	いかで好まぬ人あらん
冬ハ物事さびしきも	春ハ心のをのづのら
とけて樂み限りあし	雪もみぞれもふる雨を
人をあやまほことぞなき	のどけき春の来る時ハ
北風強く吹く冬ハ	野邊小ハ深雪木ハつら、
雨もこゝりていと寒く	障子ふはまを建廻ハし
爐火近く圍居して	ねぐらの鳥ふことあらず

斤豊寺少刀編

されど嵐も雪も歌む のどけき春の来る時の

曇りがちふる冬の空 日影もうほく晝くらさ

されど春ふもふりぬれむ 喜ばしくも雲いれで

光りのどけき天を見る いぶせく降りし雪霜の

跡も残らば消えりせぬ のどけき春の来る時の

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

社會學の原理小題す

宇宙の事ハ彼此の 別を論ぜば諸共ハ

規律の無きハあらぬか 天ハ懸れる日月や

微かハ見ゆる星とても 動くハ共ハ引力と

云へる力のあるゆゑを 其ハ引力の働ハ

又定まれる法ありて 猥りハ引けるものふらば

且つ天體の歴廻れる 行道とても同トこと

必だ定まりあるものを 又 雨 風 や 雷 や

地震の如く亂暴ハ 外面ハ見ゆるものとても

一も定まれる法あり
地をいふ虫や四足や
其組織より動作まで
又萬物の皆共
あらざる物いふまじか
別を論ぜず諸共
遺傳の法で子も傳へ
適せぬものい衰へて
桔梗からかや女郎花
牡丹も縁の唐獅

野山も生ふる草木
空翔けりゆく鳥類も
都て規律のあるものぞ
深き由來と變遷の
鳥けだものや草木の
親も備へる性質は
適れるものい榮えゆき
今の世界も在るものい
梅や櫻や萩牡丹
菜の葉も止まる蝶も

木の間轉る鶯や
雲居も名のる杜鵑
友を慕ひて奥山も
譯も分らで貝の音も
羊よ近き猿いまだ
靈とも云へる人とても
元を質せば一様も
積みかさおれる結果ぞと
見極めたるいこれぞこれ
優にも劣らぬ腦力の

門邊もあさる知更鳥や
同ト友をい呼子鳥
紅葉ふみわけ啼く鹿や
追はれてあゆむ牛羊
愚かことよ萬物の
今の體も腦力も
一代増も少しげ
今古無雙の濶眼で
アリストートルニウトンリ
タルウキン氏の發明ぞ

これ小劣らぬスペンセル	同ト道理を擴張し
化醇の法で進むのは	まのあたりみる草木や
動物而已ふあらば	凡そありとくあるもの
活物死物夫而已か	有形無形夫くの
區別も更ふあかりと	真理極めし其知識
感ずるも尚あまりあり	されば心の働も
思想智識の發達も	言語宗旨の改良も
社會の事も皆都て	同ト理合のものなれを
既ふものせる哲學の	原理の論ぞ之よ次ぐ
生物學の原理やら	心理の學の原理をを

土臺とあして今更ふ	社會の學の原理をバ
書ふものさる、最中ぞ	此書よ載せて説かる、そ
そも社會とい何ものぞ	其發達の如何なるぞ
其結構よ作用よ	社會の種類如何なるや
種族と親と其子等の	利害の異同如何なるや
男女の中の交際や	女子小子供の有様や
取扱の異同やら	種々な政府の違ひやら
違ひの起る原因や	僧侶社會のある故や
其變遷の源因や	儀式工業國言葉
智識美術や道德の	時と場所との異同ふて

遷り變りて化醇する 其有様を詳細に
 論述ふして三卷の 長き文ふぞせらるべき
 最とも目出度き美舉こそ 既ふ出てたる一卷を
 讀たる者の誰ありて 此書を褒めぬ者ぞふき
 實ふ珍らしき良書あり 社會の事よ手を出して
 何あら何とせいのをやく 責任重き役人よ
 走り書きやらあら志やべり 舌も廻いらぬくせふして
 天下の事いと飲みと 法螺吹き立て、利口ぶる
 新聞記者や演説家 此書を讀みて思慮あさい
 人をあやまる罪とがの 少しい減りもほるならん

月日の事や星の事 動物や金属や
 夫等の事いきて置きて 凡そ天下の事業は
 疊一枚させばとて 足袋を一足縫へばとて
 長の年月年季入れ 寐る眼も寐ぎよ習いねば
 出来る事いあらざるふ 獨り社會の事計り
 年季も入らず學問も みるふ及ばぬ譯ふれを
 新聞記者や役人と 成るい最と最と易けれど
 か様ふ者が多けれを 忽ち國ふ社會黨
 尚不恐ろしき虚無黨の 起るい鏡ふ見る如く
 揉めふ揉めたる其上句 虻蜂取らむの丸潰れ

秩序も建たず自由なく
再び浪風静まりて
百年足らざ掛らんを
有様見ても知れたと
妄ふ手出しゆる勿れ
廣き世界の其中ふ
盲目同士の戦よ
規ひきまらぬ棒打の
今の世界の旋風
烈しき中へついで一寸

泥海こそあるべけれ
大平海と成る迄は
革命以後の佛蘭西の
そこふ心が付きたらば
妄ふ志やべること勿れ
恐るべきもの多けれど
越したるものあらぬし
仲間入りこそあやうけれ
烈しく旋る時ふるぞ
絡き込まれたら運の盡

足も据へらば瞑眩めいけんき
ぐるくぐると廻まわいされて
上句のいてを空中へ
初て悟る其時の
後悔先き小立ぬあり
其吹く中へ過ちて
上手とこそいふべけれ
輿論を誘ふ人たちの
能く慎みて軽卒ふ

頭いいとぐら付きて
すき間もあらば廻まわいされて
絡き上げられて落されて
早遅蒔の辣椒
颶風烈しく吹く時の
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をば勉強し
働かぬやう願ひしや

ロングフェロー氏兒童の詩

尚今居士

來れわらへべかたはらり	汝が遊ぶさま見れば
我等か多年苦みて	かほとけざり疑い
忽ち解けて露ほどの	曇りも胸ふ止まらば
汝が遊びたいる、を	見ると恰も東ある
窓打あけて日ふ向ひ	さえづる鳥の聲聞て
清く流る、川水ふ	臨むが如き心地せり

流る、水も鳥のねも	照らほあさひも汝等の
心の如くゆたかあり	されど我等の心中の
かふしき秋も過去りて	寒き雪霜ふりふけり
わらへべ無く世の中を	如何ふ苦しきことあらん
わらへべ無くわれくの	後ふりむくも憂さばかり
前を望むもうべたまの	闇の夜中よ異ならば
知らばや茂る森の木を	いと美しきみどり葉ふ
清き空氣や日の光	其作用を施して

善き汁液を造り成し 幹と枝とを養ふを

知れよのどけき氣候をば かけて早くも感ぜるは

幹よそあらで軟かき 緑の葉ふそありぬるを

森を此世ふたとふれば 葉のわらうべふ比ぶべし

來れわらうべかたをらふ のどけき天を吹く風も

花ふ戯れ啼く鳥も 汝が清きこゝろよ

何如ふる事を告るやを 我耳近くさゝやけよ

思慮をめぐらし智を竭し 我等が成せるわざとても

我等が書けるふみとても 汝が様のかをゆきよ

汝が面の樂しきよ 比ぶることのふるべきや

人の賞はる詩や歌の 世ふ數多くあるをれど

完全無虧の汝等よ 及ぶべきものあらばかし

汝の生ける詩歌あり 他の皆死ふし言葉のみ

シエーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

ヘンリー四世其初
 ランカストルのデウクたり
 六萬人の將として
 王を俘ふふたれべ
 四方に逆威を震ひしも
 安穩ふてい置くべきや
 戦争止む時更ふふく
 スコット人の攻め入れり
 王を暗殺謀る者
 議院の権理打ち守り
 其數最とも多かりき

王は烈しく抵抗を
 財政最とも困難し
 王の人望失ひて
 健康漸く衰へて
 其晩年よ至りてい
 自ら悔ゆる其惡事
 心で心責められて
 安眠とてい片時も
 夫れことあらぬ苦しさよ
 此一篇のこれぞこれ
 シエーキスピールの名作ぞ
 其有様をうつしたる
 王者の數の多けれど
 廣き世界の其中よ
 幾人ありや聞かまほし
 ヘンリー四世あらざるを

山仙士

最と下賤なる我人の
今一も眠る其數の
あゝ羨し羨し
天より我も賜はりて
如何なる罪の祟りや
假令へ暫時の間あり共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何なれば眠神
くまばりかへる稿の床
心地もよげし横たはり

枕を高く高いびき
幾千萬かあるならん
眠の神よ眠り神
伽そるところ云ふべけれ
眠の神も見へおされ
胸の苦しき忘れたさ
如何すれども眠られぬ
見る影もなきあむら家の
むさ苦しきも厭はず
枕のほとりぶんくくと

飛びくる虫の羽音さへ
すやく眠むるものなる小
床の上なる天盖は
眠を誘ふ樂の音の
貴人高位の寢屋までは
實も愚なる神ぞかし
不潔な床も横たはる
王者の床も來らぬぞ
比べものふらぬのを
ゆらくゆる、帆柱の

眠りを誘ふ助ふて
伽羅沈香を炷き立て、
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞ゆある
何とて來ることのおき
何故よかく見苦しき
下賤な者と寝へするも
金の時計と號鐘と
はていぶかき神の意ぞ
高き上も安く寝る

水夫の目をば閉ぢさして	情け用捨も荒浪や
吹き来る嵐凄しく	りぎ巻く浪を巻き上げて
天地どろろく浪音は	死人も覺むる程ふる小
下い無間の地獄なる	高き柱の其上で
浪小ゆらめき眠らば	神の力を不思議ふる
摠身水ふひたされて	身を粉ふ碎く水夫ふは
斯く騒々き其折も	眠の神に付き添ふ小
草木も眠る牛三小	眠を誘ふ其工風
手を替へ品を替ゆるとも	王者の傍ふ來らぬい
依怙最負ふる神ふこそ	あゝ幸多き賤の身の

寝りや眠れや羨し	熟し思ひ合ひすれば
冠 <small>かんむり</small> 著たる頭程	苦しきものいせふあらじ

シエークスピール氏ハムレット中の一段

尚今居士

あがらふべきか但し又	なごらふべき小非るか
爰が思案のしどころぞ	運命いかふつたあきも
これ小堪ふるが大丈夫か	又さいあらで海よりも
深き遺恨小手向ふて	之を晴らばがもの、ふか
どふも心小落ちかぬる	叔も死んか死ぬるのは
眠ると同じ眠る間の	心痛のみか肉體の
あらゆるうきめ打捨たる	是ぞ望のいてふらん
ア、くぬねむる、ねむる時	万が一ゆめみるからむ

ハアとだわりが有るやうぢや	あぜと曰ふ小死し眠り
無常の風ふさをされて	此娑婆離れしまふとを
いかかる夢のきたるやら	ハテ疑の晴れぬもの
うき事長く忍ぶのも	これが為めかあなせられ
九寸五分さへ持ちたれを	其切先で一とつきふ
事をたますもやまけれど	之をば為さば慎みて
強者の非道世のそり	驕れる人のいづかしく
想ふ美人の不深切	緩み過ぎたる國の法
貴人の無禮又たとひ	いか小善しとも下人の
輕しめらる、是をまれ	堪へ忍ぶの何故ぞ

重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮しのも
死後の恐れがあるからちや
登りて歸る人ぞふき
物にごくこそ思はるれ
うきかんふんを嘗るとも
斯くと心ふ思ふ故
如何なる深き大望も
實のなることぞありける
ア、たとやかふる其風情

ういめつらういめころへは、
亦何故ぞ是はみな
死出の山路の不思議なる
如何なる事のあるやらん
たとひ此世ふ止まりて
あの世の事い恐しや
たけき心も弱くふり
花を開かぬ枯れ失せて
左いさりふがらオヒリヤよ
そふたい神をいのるなら

わーが罪障わひてたべ

シェーキスピール氏ハムレット中の一段

山仙士

死ぬるが増か生くるが増あ
 つたふき運の情なく
 堪へ忍ぶが男兒ぞよ
 一そのことよ二つふき
 死んで眠りてそれぎりと
 さらりと去つて消え行くも
 一眠りにてつもりこゝ
 萬の艱苦それぎりふ

思案をするいふ、ぞかゝ
 りきりからきり重なるも
 又もおもへばさいあらで
 露の玉の緒うちきりて
 からきくろしき世の中を
 卑怯の業よあらぬかや
 胸の焦れや現身の
 去りて去らる、ものふらば

それよまされることおきも
 眠りて後ふ又や見ん
 死んで眠りて肉身を
 如何ふる夢を見ることぞ
 無情きせふながらへて
 もといと云へばのちの世の
 人の非道や下きみや
 公事訟への永引きや
 堪へ忍ぶい何故ぞ
 一本あれは何のその

死ぬる眠ると云ふもの、
 夢の行末おぼつかた
 離れ離れ行くもの、
 人の迷ふもことわりよ
 憂い目つらい目堪ふるも
 夢を恐る、故ぞかゝ
 叶いぬ戀の悲みや
 役人づらの権柄を
 ふまくら刃金鏽力
 極樂往生出来ふなら

あだし命をまがらへて	重荷を擔 <small>か</small> て汗みづく
うんすと云はん馬鹿いふし	死ふんど <small>い</small> ても死よ兼ねて
此世の憂目堪ふるも	十万億 <small>と</small> 土とい云へど
方角さへふ誰知らぬ	人の歸らぬ國へ行き
飛んで火よ入る夏虫の	虫も知らさぬ恐怖い目ふ
逢ふのがいやさ恐ろしや	世間の人の思案して
臆病神よさそはれて	居へたる胸も小ゆるぎし
思ひ企つ大謀も	遂ふはたさず水の泡
もとを質せばこぞかし	あ、愚 <small>とら</small> さよ我ながら
くり言するも益ありや	のうこれ <small>うら</small> もう <small>うら</small> 美 <small>うら</small> しの

おへりや殿よ辨天よ	後生のねがひする時
祈て給へ我罪の	亡ぶる様ふ頼むぞや

春夏秋冬

此詩の句尾ノ二字ヲ以テ二句ヅ、韻ヲ踏ミタルモノナリ例へバ「よろこむ」暖か」ノ如シ

尚今居士

春の物事よろこばし	吹く風とても暖かし
庭の櫻や桃のえあ	よみ美しく見ゆるかあ
野邊の雲雀いいと高く	雲井はるりに舞ひて鳴く
夏は木草の葉も茂り	百日紅も咲きまけり

夕暮かけて飛ぶ蟲は	集まり來たる軒のきを
人の我家を立出で、	あは涼むらんさよふけて

秋の尾花ふをみあへし	桔梗の花も開くべし
晴れて雲あき青空ふ	照らけ月影明かふ
されど何處も同トこと	寂しく見ゆる家の外

冬の雪霜いと深く	冷ゆる手足を暖く
あさん為とて爐火ふ	近く圍居をする時ふ
風の吹き入る戸のあをい	外の方見れば銀世界

新體詩抄初編

凡の古も今も... 入の... 新體詩抄初編

我國の昔より言靈のさきいふ國といひ傳へて
長きみどりあき歌ふ文ふ妙ある人も代々少か
らば然るを今の文明の御代ふあたりて短歌よ
名ある人の彼是きこゆれど長歌をよみ文かく
人のをさくきこえざるいひとあやしく海外
の國々よても昔も今もうたといへを長きをむ
ねとして軍陣ふうたひ祭祀ふうたひ哀樂より
たひて此道ふ妙ある人代々ふたえげと云同く
天地の間お生るゝ人のげふさもあるべき事
りかゝおのれ此比大學ふ入て大人たちの西洋

の詩を我が言葉ふうつせらるを見て感慨不堪へ
ずいふですたれたるを起してかゝる新代の風
をうたひ出ばやさて此道小妙ある人の出来た
らんふい實よことたまの幸いふ國の手ぶりを
著くはた海外の人も聞つたへてあどか彼の言
葉ふうつきらん然らぬ國の光ともあるへき
事あらずやかくいふものは水屋主人幹文
とれぬも今日文眼の辨れぬもオレとア朕も
身もふしむるも思ふ文心也るも入るも外も也
此國の言も言も心も心も心も心も心も心も心も

明治十五年七月廿一日版權免許
同年八月出版
同十七年十二月十五日再版御届

撰者

外山正一

牛籠區築土前町廿番地
東京府平民

撰者

矢田部良吉

麴町區富士見町四丁目拾番地

撰者兼出版人

福岡縣平民
井上哲次郎

麴町區三番町四十八番地

